



特集 支えるカタチ

矢板市は、昭和 55 年の栃の葉国体でサッカー競技の会場地となったことを契機に「サッカーのまち」としてスタートを切った。現 NPO 法人たかはら那須スポーツクラブで理事長を務める大森氏は、栃の葉国体当時、市の国体事務局員として大会運営に携わり、それから現在に至るまで「サッカーのまち」の発展を願い、ひた向きに活動を続けている……

そして、「サッカーのまち」には、全国レベルで活躍するサッカーチームが存在する。2 年連続で全国高校サッカー選手権大会に出場し、前回大会ベスト 4、そして今大

会ベスト 8 と優秀な成績を収めた矢板中央高校サッカー部だ。全国に「矢板」の名を轟かせたその活躍は記憶に新しい。そして活躍の裏には、脚光を浴びる選手たちを懸命に支え続けたマネージャーの存在があった……

今号では、矢板中央高校サッカー部の活躍とその活躍を陰から支え続けたマネージャー、全国大会出場を支援しようと開いた、壮行会の様子などを紹介するとともに、サッカーのまちを支え続け、フットボールセンターから「新しい人の流れ」を生み出そうとその建設に情熱を注ぐ関係者の想いを合わせて紹介します。



全国大会マッチレポート

第97回全国高校サッカー選手権大会でベスト8の成績を取めた矢板中央。出場を前に白井キャプテンは、「前大会の全国ベスト4の壁を乗り越え、県代表として勇気と感動を与えられるよう全力でプレーしたい」と、強い意気込みを語ってくれました。

県予選では、高橋監督が掲げる堅守速攻を体現し県予選4試合を無失点の鉄壁の守りで勝ち抜き、2年連続9度目となる全国大会の切符を手に入れました。矢板中央高校は、全国大会でどのような戦いを見せたのか、その活躍をレポートします。

2回戦 1月2日 ニッパツ三ツ沢球技場 (横浜市)

矢板中央 2-1 日章学園 (宮崎)

体を張った守備でリードを守り切る

前回ベスト4のため、シードで2回戦からの出場となった。出だし攻守が目まぐるしく入れ替わる展開のなか、矢板中央は前半20分、左サイドからDF内田がクロスを上げると、FW伊藤が相手GKと交錯。このこぼれ球を逆サイドから駆け込んだFW望月が振り抜きゴール左隅に叩き込み先制点を決めた。勢いづいた矢板中央は再三相手ゴールを脅かすも、シュートがクロスバーに当たるなど追加点が無いまま、前

半を折り返す。後半に入り、勢いそのままに矢板中央が攻勢を強め、後半15分、FW望月がペナルティエリア内で倒されPKを獲得し、これをMF飯島が落ち着いて決め、追加点を挙げた。後半20分、日章学園のコーナーキックで、混戦の中、矢板中央の選手にあたりオウンゴールで1点を失うも、その後冷静な守備で相手にチャンスを与えず、1点差を守り切り勝利を収めた。

3回戦 1月3日 等々力陸上競技場 (川崎市)

矢板中央 1-0 立正大湊南 (島根)

厳しい場面で持ちこたえる底力を見せた

試合開始早々、前半2分、矢板中央がフリーキックのチャンスをつかむと、ゴール前の混戦からDF五十嵐が放ったシュートをキャプテンのDF白井がヒールでコースを変え、ゴールに流し込んだ。その後は、早いカウンターなど、厚みのある攻撃を仕掛ける立正大湊南に試合の主導権を握られる。前半30分、矢板中央ゴール前で相手にFKを与えるも、矢板中央は堅い守りで得点を防いだ。後半10分、相手の猛攻が

続く中、相手FWとGK安西が1対1になりピンチに陥ったが、GK安西がシュートを両手ではじくファインセーブを見せた。後半35分には、相手に決定的なシュートを放たれるも、DF白井がオーバーヘッドでクリア、体を張った守りでピンチを防いだ。後半だけで、CK7本・FK10本と相手の再三の攻撃を持ち味の固い守りで守り切りベスト8進出を果たした。

準々決勝 1月5日 等々力陸上競技場 (川崎市)

矢板中央 1-2 青森山田 (青森)

終盤、相手ゴールに迫るも一歩及ばず無念の敗退

序盤から相手にボールを支配され守りに徹する状況が続く。前半14分、矢板中央はロングスローのこぼれ球をDF後藤がゴール前に上げ、MF真島が頭で合わせ、先制ゴールを決めた。前半終了間際、体を張った守りで相手の攻撃をかすすも、セットプレーから痛恨の失点を喫した。後半も、相手に押し込まれ我慢の展開が続く。後半9分、相手FWの3連続シュートをDF陣が体を張った堅守を見せる。後半26分、

前半と同じようなセットプレーから無念の追加点を相手に許してしまう。追いつきたい矢板中央は、後半30分、MFの飯島・板橋を投入し反撃を試みる。攻勢を強め、1対1で相手ゴール前に迫るチャンスを作るもGKの好守に阻まれる。終了間際に2度のCKから同点に追いつくチャンスを獲得。最後は、GK安西も攻撃に参加して相手ゴールを狙ったが、あと一歩及ばず涙の敗戦を喫した。

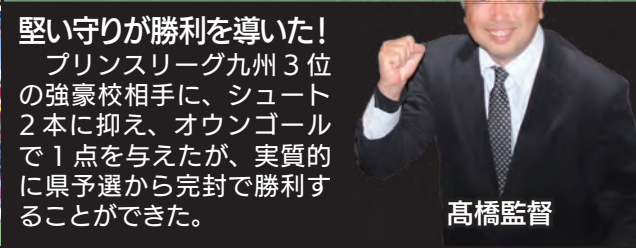
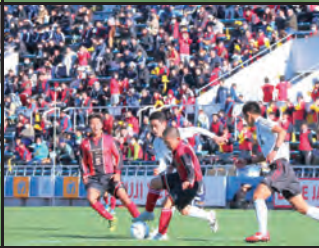
2回戦 (1月2日)



3回戦 (1月3日)



準々決勝 (1月5日)



堅い守りが勝利を導いた！
プリンスリーグ九州3位の強豪校相手に、シュート2本に抑え、オウンゴールで1点を与えたが、実質的に県予選から完封で勝利することができた。



高橋監督

白井の球覚はさすが！
開始2分の出来事、勝負を決める1点だった。ゴールに背を向けていたのに、五十嵐のシュートをヒールで角度を変えて枠内に流し込んだ技ありのシーン。



大会優秀選手 後藤 裕三

最高のチームでした！
苦勞を共にした仲間たちと全国の舞台上で戦い抜けたことがうれしい。全国制覇は成し遂げられなかったが、団結力ではどのチームにも負けていなかったと思う。



大会優秀選手 白井 陽貴

チームを支えるということ

～ 選手と共に成長できることのよろこび～



矢板中央高校 3年 サッカー部マネージャー
古賀 美樹 さん (矢板市中在住)

選手と共に成長できた！

もともとサッカーが好きという古賀さんだが、高校入学当初、サッカー部でマネージャーをするという選択肢は無かったそうだ。先にマネージャーとして入部した友人に誘われ、何となくやってみようかなという感じで始めたという。

古賀さんは、3年間のマネージャー生活を通して、選手と共に自分でも分かるくらい成長できたと語る。元々人前で話すことが苦手だったが、多くの部員たちと接しているうちに人前でも緊張することなく話ができるようになったそうだ。

昨秋の学校祭では、学年代表として意見発表を全校生徒の前で行い、最優秀賞に輝いた。

3年間、チームを支え続けたマネージャーの想いとは…

選手の活躍を間近で見ることができた

3年間の高校生活の中で、全国高校サッカー選手権大会に2度連れて行ってもらえたのは幸運だったと思う。

前回大会では全国ベスト4、先輩たちの活躍をスタンドから見守った。今大会は全国ベスト8、ベンチから選手の活躍を間近で見ることができた。出場していた選手は3年生なのでみんな



同級生、3年間一緒に頑張ってきたので、今までにないくらいうれしかった。

辞めたいと思ったこともあったが……

ボール拾い、部室棟の共用部分の掃除、100枚近いビブスの洗濯など、やることはさまざま。中でも水分補給のためのボトルづくりが大変だった。カテゴリに分かれて練習しているそれぞれの場所へ買い物カゴいっぱいボトルを詰めて運ぶ役目がある。夏場はすぐに無くなってしまいうので、作っては届けるのを繰り返す。1日中それをやっていると熱中症になったこともあった。何とか続けてこられたのは、部員からその都度感謝の言葉があったからだと思う。

部としての練習が終わった後に自主練をしている選手たちを見て、本当に



サッカーが好きなんだなと感じた。周りから「サッカー部の選手たち、頑張ってるね」などと言われるのを聞くと自分のことのようにうれしく感じた。そんな選手たちを陰ながら支えている自分を誇らしく思った。

何より印象に残っているのが、誕生日を選手たちから祝ってもらったこと。昨年のインターハイ県予選の決勝戦当日が偶然私の誕生日で、決勝を戦い終え

た選手たちから誕生日プレゼントに赤い半袖のポロシャツとハッピーバースデーの歌を贈ってもらった。優勝と誕生日のダブルでプレゼントをもらった気分。もらったポロシャツは、夏の間うれしくて毎日着ていた。

つらいこともあったけど、マネージャーを続ける中で、選手を支えること、選手と共に人として成長できることの喜びを知った3年間だった。



3年間の献身的な支えに感謝



160人を超える部員がいるなか、本人は多く語らないが、いろいろな苦労があったと思う。

彼女が1年生の時、春には数人いたマネージャーが、年を越すころには1人だけになっていた。

3年間通して支えてくれたのは彼女だけ。本当に良くやってくれたと感謝している。マネージャーは光が当たることのない地味な仕事。ユニフォームやビブスの洗濯・管理、選手が水分補給をするためのボトルづくりは、3年間で何千本、何万本作ったか分からないくらい。

青森山田戦で負けた時は、ユニフォームを洗濯しながら涙を流していた。ユニフォームには、選手の汗と涙だけでなく、マネージャーの汗と涙、そして3年間支え続けた彼女の想いがしみ込んでいる。

サッカーのまちとして、できること

～ フットボールセンターから「新しい人の流れ」をつくりたい! ～

小さな田舎まちの希望

私たちは、フットボールセンターの運営にあたって、「新しい矢板のファンをつくる」、「スポーツを楽しんでもらう」、「子どもたちが戻って来られる場所をつくる」ということを目標に取り組みたいと思っています。

矢板市は小さいまちですし、少子高齢化や人口流出があるなかで、本当にできるのか?と思われるかもしれません。

しかし、フットボールセンターの誘致にあたっていただいた32,034人の署名は、市民の皆さんが、この矢板市に明るい未来を築きたいという期待の表れであると感じています。また、矢板には全国から生徒が集まる「矢板中央高校サッカー部」や私たちNPO法人たかはら那須スポーツクラブが運営する「ヴェルフェたかはら那須」もあり、サッカーを志す人にとっては、目標のひとつとなっている場所です。

私たちは、フットボールセンターについて、単に栃木県内のサッカーの振興を図る施設とは捉えていません。市民の皆さんの熱い思いやサッカー環境の優位性を活かして、フットボールセンターから「新しい人の流れ」を生み出すことで、目標に向かって歩んでいきたいと考えています。

ひとが集う場所だからこそ

フットボールセンターの整備によって、県内サッカー選手の育成という子どもたちが夢に挑戦できる環境が整い、社会人では身近な環境でサッカーを楽しんだり、県内外のチームが集まって試合や練習試合を行ったりする環境ができます。

県内外のトップレベルの選手はもとより、それを支える家族や友人。もちろんレクリエーションとしてスポーツを楽しむ市民も。子どもから高齢者までがフットボールセンターに集まることで、多種多様な交流が生まれます。こうした「交流」は、より重厚な人間関係を生んでいくと思います。また、何より来ていただく方たちに「矢板の新しいファン」になってもらうチャンスになると思います。

カギになるのは「ひと」と「場所」

スポーツを通じて多くの「ひと」に同じ思いを持ってもらいたい。だから、フットボールセンター事業では、重厚な人間関係によって培われる人づくりを通じて、誇れる「場所」を創っていきたく思います。

充実した人材や施設という、県内随一の恵まれた環境でスポーツに取り組む。こうした体験の積み重ねは、矢板に対する郷土愛を強くすると考えています。

ここから巣立った子どもたちが矢板に戻ったときに、変わらずに迎え入れられる場所であり、活躍できる場所でありたいと、私たちは思っています。

NPO 法人たかはら那須スポーツクラブとは…

1978年に立ち上げられた矢板サッカークラブ（現：ヴェルフェたかはら那須）にルーツを持ち、2007年に総合型地域スポーツクラブとしてNPO法人化した。

活動の中心となるのはサッカー事業（サッカー教室やクラブチームの運営）だが、さまざまなスポーツに気軽に親しめる環境を提供

しており、卓球や太極拳などのプログラムにも取りこんでいる。また、活動の幅をeスポーツの分野へも広げるべく準備中である。



新たな夢への第一歩として ～スポーツを愛するすべての人へ～



NPO 法人たかはら那須スポーツクラブ
理事長 大森 崇由

私たちにとって、より多くのスポーツプログラムを提供できる施設を自らの手で整備し、運営するという事は、長年の夢でした。この事業は、若手のリーダーである鈴木副理事長を中心に進めています。こうした若手の視点を充分に取り入れ、市民をはじめ県内外から訪れる方たちに愛される施設となるよう、十分な準備をしていきたいと思っています。

私たちの使命は、フットボールセンターを活用した「ひと」づくり、また、集まった「ひと」の力によって、矢板をかけがえのない「ふるさと」にしていくことだと考えています。誰もが輝くことのできるフットボールセンターとして活用していただくために、皆さまのお力添えをよろしくお願いいたします。より充実した運営を行うために、市の協力を得て、クラウドファンディング型ふるさと納税の募集をしています。ぜひ私たちの「思い」に賛同いただき、ご協力くださるようお願いいたします。



ふるさと納税で応援する

サッカーのまちだからこそ、 地域で支える土壌がある

全国高校サッカー選手権大会へ出場する矢板中央高校サッカー部を激励しようと、昨年12月に壮行会が行われました。

各主催者とも、同校サッカー部の全国での活躍を激励する言葉があったほか、まちに明るい話題を届けてほしいと期待を寄せるあいさつでした。

サッカーのまちとして、自分たちの手で、自分たちのできることを、地域ぐるみ

で精一杯応援しようとする姿が印象に残りました。

壮行会を通して、同校サッカー部の高橋監督は、「全国大会出場48チームの中で、日本一地域から応援されているチーム。感謝を忘れずに頑張りたい」と話し、白井キャプテンも「地域の方に勇気・感動を与えられるよう、全力でプレーし、ベスト4を超えたい」と、力強く話しました。



約130人が激励に訪れました。会員からの激励金と、会員から無償提供を受けた絵画などのオークション販売の売上金、合わせて約50万円を矢板中央高校サッカー部に贈呈しました。

東泉会長からは「地域に明るいニュースを届けて」とエールが送られました。



まちづくり矢板の尾形代表理事は「親元から遠く離れ生活する選手も多い。地域ぐるみで応援し、全国に送り出したい」と話し、矢板中央高校のPTAや地元有志合わせて約40人が協力して、集まった選手たち130人にカレーやから揚げなどを振る舞いました。



齋藤市長は「前回以上の成績を残し、矢板の名を全国に轟かせてほしい」と話し、激励金を手渡しました。また、氏家法人会より横断幕が送られたほか、市婦人会の方たちから、りんごとりんごジュースが選手たちに振る舞われました。

